

ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第三十六号

Jeff Pippenger

2026-01-27

第三十六番

ジェームズ・ホワイトが1844年10月22日以後のミラー派の離散であると同定する「bustle」のただ中であって、ウィリアム・ミラーは1847年に夢を見、その二年後に永眠した。

もしウィリアム・ミラーが第三のメッセージの光を見ることができていたなら、彼には暗く神秘的に見えた多くの事柄は解き明かされたであろう。しかし、彼の兄弟たちは彼に対する愛と関心がいかに深いかを表明しており、彼は彼らから身を引き離すことはできないと思った。彼の心は真理へと傾くのだが、そこで兄弟たちに目を向けると、彼らはそれに反対していた。イエスの来臨を宣べ伝える働きにおいて彼と肩を並べて立ってきた者たちから、彼は身を引き離すことができただろうか。彼は、彼らが自分を迷いに導くことなど決してあるまいと考えた。

神は、彼がサタンの権勢と死の支配の下に落ちることを許し、また、真理から絶えず彼を引き離していた者たちから彼を隠すために、彼を墓のうちに隠した。約束の地に入ろうとしていたとき、モーセは過ちを犯した。同様に、私は、ウィリアム・ミラーが、まもなく天のカナンに入ろうとしていたときに、彼の影響力が真理に逆らって働くことを許すという点で、過ちを犯したのを見た。彼をこのような事態へ至らしめたのは他の者たちであり、その責めは彼らが負わねばならない。しかし、御使いたちはこの神のしもべの尊い塵を見守っており、最後のラツパの響きとともに彼は現れ出るであろう。

確固たる基盤

私は、よく守りを固めて確固として立ち、共同体の確立された信仰を動揺させようとする者をいささかも容認しない一団を見た。神は彼らを是認して顧みられた。私は三つの踏み段—第一、第二、第三天使のメッセージ—を示された。私に付き添っていた天使は言った。「これらのメッセージの一つの石材を動かし、一本の留め釘を揺り動かす者に災いあれ。これらのメッセージの真の理解は死活的に重要である。魂の運命は、それがいかに受け入れられるかに懸かっている。」私は再びこれらのメッセージに沿って導かれ、神の民がいかに尊い代価を払ってその経験を購ってきたかを見た。それは多くの苦難と激しい闘争を通して得られたものであった。神は彼らを一步一步導き、ついには彼らを堅固不動の基台の上に置かれた。私は、個々の者がその基台に近づき、その基礎を吟味するのを見た。喜びつつ直ちにその上に踏み出す者もいた。他の者はその基礎に不平を言い始めた。改良が加えられれば、その基台はいっそう完全になり、人々はいっそう幸福になるのだと彼らは望んだ。中には、その基台を検分しようとしてそこから降り、据えられ方が誤っていると断言する者もいた。しかし私は、ほとんどすべての者がその基台の上にとしっかりと立ち、降りてしまった者たちに不平をやめるよう勧めているのを見た。というのも、神こそ主建築者であり、彼らは神に

敵対して戦っていたからである。彼らは、自分たちを堅固な基台へと導いた神の驚くべきみわざを語り、心を一つにして天に目を上げ、大声で神を崇めた。このことは、不平を述べて基台から離れていた者たちのうちの幾人かに感化を与え、彼らは謙遜な面持ちで再びその上に踏み出した。『初期の著作』、258。

ミラーの驚くべき業

ウィリアム・ミラーの「驚くべき働き」は、「堅固で不動の台」であった「確固たる基礎」へと導いた。「不動の台」の「基礎」および、1849年のミラーの死後に持ち込まれた「台」と「基礎」の双方に対するその後の攻撃が、彼の夢の中に示されている。

ウィリアム・ミラーは、アドベンティズムの基盤の象徴である。

彼はまた、1798年から1863年に至るミラー派の歴史の象徴でもある。

彼はまた、1798年から1844年に至るミラー派の歴史の象徴である。

彼はまた、1798年から日曜法に至るまでの三天使の歴史の象徴でもある。

彼は、1798年より1844年に至る四十六年間によって象徴されている。

彼は、「2,520」と「2,300」との関係において、「220」という数によって表される。

彼は「七つの時」-すなわち2,520-によって象徴される。

彼はその二千三百によって表されている。

ミラーの二つの夢は、ダニエル書二章と四章に記されているネブカドネツアルの二つの夢によって予表されていた。

1798年の期間はネブカドネツアルをもって始まり、1863年にベルシャツアルをもって終わる。

1798年から日曜法に至る期間は、ネブカドネツアルに始まり、ベルシャツアルに終わる。

ミラー派の歴史の象徴としての彼は、2,520に関するアルファの発見と2,300に関するオメガの発見との間に見出された諸真理を表す基礎の象徴である。ウィリアム・ミラーの夢について論じる中で、ジェームズ・ホワイトは、その「鍵」とはミラーの聖書研究の方法であると指摘した。この方法論は、ミラーの肩に置かれたダビデの鍵である。なぜなら、彼は、1844年10月22日にイザヤ書22章22節が成就したときに終結した2300年の預言を提示したからである。

2023年以降に封印が解かれ始めた真理は、『ハバククの板』に関する95回の講義において既に明らかにされていた真理であり、現在「Truth」という新たな枠組みの中に位置づけられつつある。

2023年7月の「荒野で叫ぶ者の声」の呼びかけは、2020年7月18日の宣言に応答して悔い改めるべき者たちには、泣きと嘆きが必要であることを明らかにした。賢いおとめたちのうちに入る者たちは、ダニエル書九章の祈りに一致して悔い改めるべきであった。これは

、レビ記二十六章において、自らが散らされたことを認める者たちの祈りである。

ミラーは次のように述べる。「このように私は、自らの大いなる喪失と負うべき責めのゆえに泣き嘆いているうちに、神を思い起こし、神が私に助けを遣わしてくださるよう切に祈った。すると直ちに戸が開き、一人の男が部屋に入って来た。そのとき、人々は皆部屋から出て行った。彼は手に塵払いの刷毛を持って窓を開け、部屋の塵や屑を掃き出し始めた。」

『助け』を『切に祈り求めた』ときに開かれた戸は、ミラーの心であった。ラオデキアに対する真実の証人としてのイエスは、入ることを求めて人々の心の戸を叩いておられる。その戸が開かれたとき、分離の過程が始まった。その戸が開かれたとき、「窓」もまた開かれ、その「窓」とは天の窓である。

ヨハネは、黙示録第十九章において、花嫁が自らを整えた直後に、主がご自身の白馬の軍勢を起こされたとき、天の窓が開かれたのを見た。その軍勢は、荒々しい東風のメッセージに応じて立ち上がる、エゼキエルの軍勢である。その軍勢とは、麦と毒麦の分離が成就するとき、戦う教会から凱旋の教会へと変えられる、その凱旋の教会である。その分離はまた、ラオデキアの経験からフィラデルフィアの経験へと変わることも表象されている。ミラーは心を開いて真実なる証人を迎え入れ、真実なる証人は麦と毒麦を分け、こうしてご自身の白馬の軍勢をいのちに甦らせた。

2023年12月31日、人々が去った後、塵払いの刷毛を手にした人がその部屋に入り、誤謬の瓦礫を取り除く務めに着手しつつ、ハバククの表の古き真理を新たな真理の枠組みのうちに位置づけ始めた。

救い主は、族長や預言者たちが語ったことを廃するために来られたのではなかった。というのも、まさにこれらの代表的な人々を通して語っておられたのは、ほかならぬ御自身だからである。神の御言葉にあるすべての真理は、みな主から出ている。ところが、これらのかけがえのない宝石は、誤った枠に据えられていた。その尊い光は、誤りに奉仕するものとされていた。神は、それらが誤りの枠から取り外され、真理の枠組みに据え直されることを望まれた。この働きを成し遂げることができるのは、ただ神の御手だけであった。誤りと結びつけられていたために、真理は神と人との敵の目的に奉仕するものとなっていた。キリストは、それが神に栄光を帰し、人類の救いのために働くところに置くために来られた。『The Desire of Ages』287頁。

2024年に教えられた最初の真理の一つは、2020年7月18日の失望の説明であった。行に行を重ねて、すべての改革線における最初の失望が、十人の乙女のたとえにおける主要な道標として2020年7月18日を指し示していることが認識された。失望という主題は、聖所の真理を開く「鍵」となった。これに対して、1844年の大失望においては、聖所こそがその失望を解き明かす「鍵」であった。

塵払いの男であり、またユダ族の獅子でもある方は、2023年に「真夜中の叫び」のメッセージの封印を解き始めた。私たちは今や、ミラーの夢における、その方がより大きな箱を卓上に置き、太陽より十倍も明るく輝くべき真理をそこに投じている、その段階に至っている。それらの宝石の一つは、預言的叙述においてその方が誰であるかという啓示である。

預言の封印が解かれるとき、彼はユダ族の獅子として、古き真理を取り上げ、それらを「真理」の三段階という新たな枠組みに組み入れる。その枠組みは、アルファにしてオメガ、最初にして最後であられるキリストによって保たれている。神の言（ことば）であるお方として、彼はご自身の御言葉のあらゆる要素を采配し、統御された。パルモニとして、彼は数学のあらゆる側面を設計された。

ペテロがカイサリア・ピリピにいた第三時に、自らを「パルモニ」と名乗り、「預言的フラクタル」を強調された。預言の主としてのキリストに関する最後の啓示の一つは、マタイ16章18節においてペテロによって表象される「預言的フラクタル」への強調であり、それは1.618によって象徴され、自然界では黄金比と呼ばれるが、パルモニによって「預言的フラクタル」と呼ばれる。

私たちは、27~34の聖なる一週のうちには内在する預言的フラクタルの同定に着手したばかりである。ヨエル書へ向かう途上で再びそこに戻る前に、ミラーの夢の考察に、預言的フラクタルの強調を付加しておく必要があった。

ミラーが人々に「来て見よ」と呼びかけ、また塵を払う男としてのキリストがミラーを「来て見よ」と招いたその期間は、1798年から日曜令に至るまでである。しかし、その全体史の内部には、1798年から1863年に至る期間というフラクタルが含まれている。さらに、9/11から日曜令に至るフラクタル、そして2023年から日曜令に至る別のフラクタルも含まれている。

彼が喧騒のただなかで目を閉じたとき、彼は、主が御業を完成させようと試みられたが果たされなかった1849年の歴史を象徴していた。彼は2023年に復活する。なぜなら、彼はモーセと共に街路で殺されたエリヤだからである。彼は1849年に死に、その後2020年7月18日に再び死んだ。

彼の夢は1847年に与えられ、そののち、主は再び御手を伸ばし、1850年の図表を公表された。十四万四千の歴史において主が再び御手を伸ばされるとき、ミラーは復活する。

イスラエルおよびユダ双方の離散の起点は、イザヤ書において提示されている。

アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツィン。六十五年のうちにエフライムは打ち砕かれて、もはや民ではなくなる。エフライムの頭はサマリヤ、サマリヤの頭はレマリヤの子。もしあなたがたが信じなければ、必ず堅く立つことはできない。イザヤ書7:8、9

預言は紀元前742年に与えられ、十九年後の紀元前723年にはイスラエルがアッシリアによって離散させられ、その後さらに四十六年後にはユダがバビロンによって離散させられた。この三つの年は、十九年の期間と、それに続く四十六年の期間を表している。これら二つの預言がそれぞれ1798年と1844年に終結したとき、紀元前742年から紀元前723年に至る最初の十九年は「アルファの十九年」であり、それは1844年から1863年に至る「オメガの十九年」を表していた。

ミラーはオメガに入って五年目に死去し、十九年と七年後に、ヒラム・エドソンの「七たび」に関する論考が公刊された。七年後に「七たび」は退けられた。1856年は、1863年

の日曜法に先立つ封印であるはずであったが、そうはならなかった。

第三の天使は、1844年、1888年、および9/11に到来した。ホワイト姉妹は、ニューヨーク市の大いなる建物が倒れ落ちるとき、黙示録第十八章第一節から第三節が成就するであろうと指摘した。

Please provide the exact English text of Revelation 18 you want translated. Since different editions vary and you asked me not to look up references, I need the precise wording to translate accurately.

第一節-これらの事の後に、私は大いなる權威を帯びた別の御使いが天から下って来るのを見た。地はその栄光によって照らされた。

第二節-そして、彼は力強い大声で叫んで言った。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。そして、悪霊の住処となり、あらゆる汚れた霊の牢獄となり、あらゆる汚れた憎むべき鳥の檻となった。」

第三節-すべての国々は、彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、また地の王たちは彼女と淫行を行い、また地の商人たちは、彼女のぜいたくの豊かさによって富み栄えた。

力ある第一の御使いが、その手に使信を携えて下って来た。ヨハネは行ってその小さな巻物を取り、これを食べるよう命じられた。その第一の御使いは、地をその栄光によって照らす黙示録十八章の御使いと同じ働きを行う。これは、第一の御使いがアルファであり、第三の御使いがオメガであって、初めは常に終わりを指し示すからである。

イエスは力ある御使いに、地上に降りて地に住む人々にご自身の再臨に備えるよう警告することをお命じになった。御使いが天でイエスの御前を去るとき、きわめて明るく栄光に満ちた光が彼に先立って進んだ。私は、彼の使命はその栄光によって全地を照らし、来たるべき神の御怒りを人々に警告することであると告げられた。『初期の著作』245ページ。

第一の御使いはヨハネの黙示録十八章一節である。

そして、これらの事の後に、私は、大いなる權威を有するもう一人の御使いが天から下って来るのを見た。地はその栄光によって明るくされた。

第二の天使は黙示録第十八章第二節である。

彼は力ある大声で力強く叫んで言った、「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。それは悪霊の住みかとなり、あらゆる穢れた霊の牢獄となり、穢れて憎むべきすべての鳥の檻となった。」

第三の天使は、ヨハネの黙示録第十八章第三節である。

なぜなら、すべての国々は彼女の淫行の憤怒のぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と淫行を行い、地の商人たちは彼女の贅沢の豊かさによって富み栄えたからである。

第三節において型として示されているように、日曜法において、すべての王たちはその淫婦と姦淫する。第二の天使のメッセージは、バビロンが倒れたということであり、それが第二節である。第一の天使の使命は、その栄光をもって地を照らすことであり、それが第一節である。第一節は9/11である。第二節は、9/11以来、人類全体にわたって進行してきた分離の過程であり、第三節は日曜法である。このゆえに、9/11は第三の天使のメッセージであり、日曜法もまた同様である。第一から第三節において表されているように、9/11は迫り来る日曜法の警告であり、第四節の別の声は日曜法である。黙示録十八章の第一の声は、迫り来る日曜法の警告であり、その警告は日曜法において生きた現実へと変化する。

9/11から日曜法に至るまでの時期は、ミラーの夢におけるアルファの「来たれ、見よ」からオメガの「来たれ、見よ」に至る期間によって予表されている。9/11と日曜法の間には、宝石は部屋の中央にあるミラーの机の上に置かれ、散らされ、埋もれ、そして塵払いの男によって回復される。小さな書を携えて1840年に降臨した天使は、9/11に降臨した天使を表象する第一の、すなわちアルファの天使であった。その天使は、ヨハネがその書が甘いが苦くなると告げられる第十章において示されている。

ヨハネは、ミラー派によって象徴された第一の天使の運動を代表しており、また十四万四千の運動も示していた。何よりもまず、彼は、預言者が常にそうであるように、終わりの日を代表していた。このゆえに、彼はその書がまず甘く、次いで苦くなるであろうと前もって告げられた。ミラー派はこれを前もって知らなかったが、十四万四千はこれを知っていなければならない。

第一の天使の使者としてのミラーは、小さな巻物を食べた者の最たる象徴である。粉ひき職人として、彼は麦と粳殻を選り分け、穀粒を粉に挽き、食されるべきパンを作る務めであった。彼は、そのパンを部屋の中央にそれを置き、望む者は皆に「来て見よ」と呼びかけることによって、それを分かち合った。しかし、天使の手から巻物を取った者の象徴としては、ミラーは、ヨハネのように、第一の天使の初期の時代よりもむしろ第三の天使の後期の時代に言及している。彼の夢において、彼はまず、自分のメッセージを見えざる手によって受け取ったと我々に告げている。黙示録十章の第一の天使はその手に小さな巻物を持っているが、1840年のアルファに対するオメガである黙示録十八章の天使の手には書が示されていない。そして、それこそがミラーが受け取った書、すなわち見えざる手からの書である。ミラーの「来て見よ」は9/11であり、ちり払いの男の「来て見よ」は日曜法である。

アルファとオメガの「来て見よ」のあいだには、第二の御使いのメッセージが位置している。というのも、アルファは9/11であり、それは18章1節に当たる。2節は第二の御使いで、その結語は3節において与えられ、そこが日曜法であり、またオメガの「来て見よ」である。ミラーの夢においては、第二の御使いとバビロンの陥落は「scatter」という語が七回用いられることによって表象されており、叙述全体は、真理が誤謬に圧倒されることを示している。

第一の天使と第三の天使は、それぞれ1840年8月11日と9/11に、取って食べなければならないメッセージを携えて降臨した。これら二つの日付は、『黙示録』第十八章第一節に符

合する。

基礎的諸真理は、1843年の開拓者図表をハバククの二つの表のアルファとして、1842年5月に公刊された。2012年には、1842年5月に符合する形で、ハバククの表が公刊された。

ミラー派は1844年4月19日に最初の失望を経験し、それは2020年7月18日を予表していた。その時、第二の天使が到来し、その到来は黙示録18章2節に符合した。その失望は第一の天使の終結を画した。そこにおいて第二の天使が到来し、「十人の乙女の警え」における待延の時が始まった。第一の天使の歴史は第二の天使の歴史と並行して進むことになっており、このように適用するなら、第二の天使の到来は、1840年および9/11における第一の天使の到来と一致する。

1844年4月19日に予表されていた遅延の時が、9/11に到来した。9/11において、イスラムの四つの風が解き放たれ、次いで押しとどめられた。ヨハネ黙示録の四つの風は、イザヤ書の「荒ぶる風」であり、預言の「東風」であり、また、印を押す御使いは東から上って来る。彼が上って来るとき、ホワイト夫人によれば、彼は「とどめよ、とどめよ、とどめよ、とどめよ」と四度叫ぶ。第二の天使の到来によって始まる遅延の時は、十四万四千人の額に印が押されるまで四つの風が押しとどめられていることとして表現されている。

第一の失望ののち、サミュエル・スノーは「真夜中の叫び」のメッセージを取りまとめるように導かれ、こうして2023年7月における「荒野で叫ぶ者の声」を予表した。

エクセターのキャンプ集会において、試みの油を基準とした乙女たちの分離は、契約の使者の働きに一致して、ミラー派を清め、また純化した。エクセターのキャンプ集会は封印を象徴した。なぜなら、その後の働きは怒濤のように、あるいは強大な軍勢のように前進し、1844年10月22日に第三の天使が到来するまで続いたからである。この歴史の鍵は分離である。

第二の天使は、第一の失望のときにそうであったように、到来するときに分離の働きを行い、それは10月22日の分離をもって終結した。その二つの分離のあいだに、第二の天使のメッセージが宣べ伝えられた。第二の天使の働きは、油の最終試練に至るまでの漸進的な分離である。油の最終試練は、第三の天使の試金石へと導く。その試金石はイエスにとって十字架であり、「油搾りの園」を意味するゲツセマネの園が十字架という試金石に先行し、乙女たちの油の試練が1844年の「閉じた戸」に先行した。

審判が続くその最終試験は、古代イスラエルにとって第十の試験であった。彼らはそのとき、荒野で死ぬことを宣告された。カデシュであれ、ゲツセマネであれ、あるいはエクセターであれ、審判に先立ち二つの階級が分けられる最終試験は、日曜法に際して戸が閉じられる審判に先行する、2023年以後の最終試験を指し示している。その最終試験とは封印である。最後の試験があるということは、最初の試験の存在を含意する。

2023年、ユダ族の獅子が御手を取り去ることによって遅れるとされた幻の封印を解かれたので、遅延の時は終わった。そのとき、サミュエル・スノーの働きが始まった。

第一の天使と第二の天使の期間を互いに平行させて対応づけるなら、神の民が「その使信を取って食べよ」との命令にいかに応答するかによって試される使信を携えた天使の

降臨が指し示される。ついで、その基礎的使信は公に出され、やがてその基礎的使信は失敗する。すると第三の天使が到来する。第三の天使の期間は、オメガの十九年とされる、紀元前742年から紀元前723年までの十九年間である。

1844年から1863年に至る期間と、紀元前742年から紀元前723年に至る期間とは互いに並行し、さらに第一の天使と第二の天使の期間とも並行する。これら四つの預言的歴史の線は、9/11から日曜法に至る期間と符合する。これら五つの線は、ミラーのアルファ「来て見よ」とキリストのオメガ「来て見よ」の歴史である。

四かける七

正しく理解されたレビ記二十六章は、「七つの時」を四度にわたり指し示しており、この「七つの時」はミラーと彼のメッセージの象徴である。1842年、ミラーの「七つの時」に関する理解は、ホワイト姉妹が「主の御手により導かれた」「変更してはならない」と述べている1843年の図表に明記された。その七年後の1849年にミラーは死去し、さらに七年後にはハイラム・エドソンによって「七つの時」のメッセージが記録に付され、さらに七年後にはそれが退けられた。

1842年にハバククの第一の表が刊行された。

1849年、1843年の図表上の「七つの時」のアルファの使者が死去する。

1856年に、1850年の図表上の「七つの時」のオメガの使者は無視される。

1863年にハバククの二枚の板は拒絶され、1863年の図表が刊行された。

冒頭には神的な図式が掲げられ、末尾には人間的な図式が掲げられる。その中間においては、二人の使者が特定される。というのも、第二の使信は常に二重性を帯びているからである。

第一の天使

1842年にハバククの第一の表が刊行された。

第二の天使

1849年、1843年の図表の老いた使者が死去する。

1856年、1850年の図表の新たな使者は無視された。

第三の天使

1863年にそのメッセージは退けられ、1863年の図表が刊行された。

「七つの時」の四つの象徴を、七年ごとに等間隔で示す二十一年間の期間である。アルファの使信が公刊され（1842年）、アルファの使者が死去し（1849年）、オメガの使者は無視され（1856年）、オメガの使信は拒絶された（1863年）。これらは2012年、2020年7月18日、2023年、そして間もなく到来する「日曜法」を予表している。1849年のミラーの死は2020年7月18日と符合する。使者と使信は2023年に復活した。オメガの使信はいま封印

が解かれつつあり、その後には1863年の「日曜法」が続く。

ミラー派運動においては、メッセージが確立され、その後、使者は死んだ。それに並行する運動においては、メッセージが確立され、その後、メッセージが死んだ。そのメッセージは1856年と2023年に復活した。1863年には「背教」という呼称が与えられ、日曜法におけるそれに対応するものには「勝利」という呼称が与えられる。2023年以来と同様に、1856年の「七つの時」に関する頭石たるオメガの光の封印の解き明かしが、1863年の背教と日曜法における勝利に先立って提示されている。

続きは次回の記事でお届けします。

ウィリアム・ミラー：1782年-1849年

ウィリアム：「意志」と「兜」-「断固たる保護者」、「確固たる守護者」、または「意志の強い戦士」。

粉挽き職人：製粉所を操業する者。とりわけ、穀物を粉に挽く製粉所の操業者。

意志堅固なる勇士

聖書の神的権威を疑うに至っていたが、なお真理を知ることが誠実に求めていた、高潔で誠実な心をもつ一人の農夫こそ、キリストの再臨を先頭に立って宣べ伝えるために神に特別に選ばれた人物であった。他の多くの改革者と同様に、ウィリアム・ミラーは若き日に貧困と闘い、こうして精励と克己という大いなる教訓を学んだ。彼の出自の家族の者たちは、独立心と自由を愛する精神、耐え忍ぶ力、そして熱烈な愛国心によって特徴づけられており、これらの特質は彼自身の性格にも顕著であった。彼の父は革命軍の大尉であり、ミラーの若年期の窮迫した境遇は、あの嵐のような時期の闘争と苦難のただ中で父が払った犠牲に起因するとみることができる。

彼は強健な体質の持ち主であり、幼少のころからすでに、常人を超える知的力量の証左を示していた。年を重ねるにつれて、このことはいよいよ顕著になった。彼の知性は活発で十分に発達しており、知識に対する鋭い渴望を抱いていた。大学教育の利点にあずかることはなかったが、学問を愛する心と、慎重な思索および綿密な批判の習慣とによって、彼は健全な判断力と広い見識を備えた人物となった。彼は非の打ちどころのない道徳的品性と羨望に値する名声を有し、誠実、儉約、慈善のゆえに一般に高く評価されていた。彼は精力と勤勉によって早くも生活に足るだけの資産を築いたが、なお学究の習慣を堅持した。彼は文官および軍務の各種の官職を立派に務め、富と栄誉への道は彼に大きく開かれているかのように見えた。『大いなる論争』317頁。

神に関する知識は、精神的努力なしに、また、真理の純粋な穀粒から人間とサタンがそれによって真理の教理を歪曲してきたもみ殻をより分けるための知恵を求める祈りなしには、得られない。サタンとそれに結託した人間の代理人たちは、誤謬というもみ殻を真理という麦に混ぜ合わせようと努めてきた。私たちは隠された宝を熱心に探し求め、人間の考案を神の命令からより分けるために、天からの知恵を求めるべきである。聖霊は、贖いの計画に関わる偉大にして尊い真理を求める者を助けてくださる。私は、聖書を通り一遍に読むだけでは十分ではないという事実を、すべての人に銘記していただきたい。私たちは探し求めなければならないが、これは、その語が含意す

るすべてを執行することを意味する。鉱夫が金脈を見いだすために熱心に地を探るように、あなたがたも、サタンが久しく人から隠そうとしてきた隠された宝を求めて、神の御言葉を探り求めるべきである。主は言われる、「もしだれでも御旨を行おうとするなら、その教えについて知るであろう」。ヨハネ 7:17, Revised Version.

神の御言葉は真理であり光であって、あなたの足のともしびとなり、神の都の門へ至る道の一步一步を導くべきものである。このゆえに、サタンは、主に贖われた者がその上を歩むために築かれた道を妨げようと、かくも必死の努力を傾けてきたのである。自分の考えを聖書に持ち込み、自分の見解を中心に据えて真理をそれに従属させてはならない。探究の戸口において自分の考えを脇に置き、へりくだり静められた心で、自己をキリストのうちに隠し、切なる祈りをもって、神からの知恵を求めるべきである。神の啓示された御旨はあなたの個人的かつ永遠の益に関わるがゆえに、あなたはそれを知らねばならないと感じるべきである。聖書は、あなたが永遠のいのちへの道を知るための指針である。何よりもまず、主の御旨と御道を知ることが願うべきである。自分の理論を証明するために都合よく解釈できる聖句を見いだすことを目的として探究してはならない。神の御言葉は、そのようなことは聖書を曲げて自らの滅びを招く所業であると宣言しているからである。あなたはあらゆる偏見を捨て去り、祈りの霊をもって神の御言葉の探究に臨まなければならない。Review and Herald, 1894年9月11日。

ウィリアム・ミラーはマサチューセッツ州ピッツフィールドで生まれた。彼の正規の学校教育はわずか18か月にとどまったが、強い読書習慣によって独学で教養を身につけた。また、若くして著作活動を始め、詩作を行い、日記を記した。読書によって不信仰の著述家たちに接し、彼らから自然神論の方向へと影響を受けた。二十代後半には治安判事となり、1812年戦争に従軍した。この戦役のさなかに経験したいくつかの出来事が、人格的な神へと彼の心を向かわせた。1816年までには回心を遂げ、熱心に聖書研究を始めた。彼はこう記している。「聖書は……わたしの喜びとなり、イエスにあってわたしは友を見いだした。」

1818年までに、預言の研究において、彼はイエスが「およそ1843年」に再臨すると結論づけた。1831年、そうするようにとの強い確信と摂理的な導きを受け、彼は小規模な集会において公に自らの研究を発表し始めた。1839年、著名な編集者J・V・ハイムズと出会ったのち、主要都市で大規模な群衆を前に説教する道が開かれた。多くの人々の反対にもかかわらず、彼の説教と、再臨のメッセージを受け止めた他の者たちの説教は顕著な影響を及ぼし、キリストの間近な再臨を信仰として受け入れた者は最大で10万人にのぼった。1840年3月、12歳であったエレン・ハーモンは、メイン州ポートランドで彼の説教を聞いた。彼女は次のように回想している。「ミラー氏は、聞く者の心に確信を起こさせるほどの厳密さで、預言を綿密にたどった。彼は預言期間に詳しく論及し、自説を補強する多くの根拠を提示した。さらに、備えのない者たちに向けられた彼の厳粛にして力強い訴えと戒めは、群衆をまるで魅了されたかのように引きつけた。」Life Sketches, 20.